

最後に本書の刊行主体である韓国日本問題研究会について簡単に解説しておこう。この会はその名のごとく、日本に頼る諸問題を研究するために、本年二月韓国釜山で創立された民間の学術研究団体である。会のメンバーは、会長夫雲鳳氏（釜山大学校法大教授）、副会長李鍾錫氏（南星女子高校校長）・金義煥氏（釜山工業専門学校教授）そのほか釜山地方の学者やジャーナリストなどが多数参加しており、この会の最初の事業は前述せるごとく、本書の刊行であるがそのほか本年十月には会誌の発行と学術セミナーを計画しているとのこと、今後の活躍が大いに期待される。

（四六倍判、全九冊。編集韓国日本問題研究会 韓国釜山市東萊区温泉洞二
三、発行成進文化社 韓国ソウル市鍾路区、発売東洋書院ソウル市鍾路区鍾路六街九二―一
路六街二七九）

山本達郎・荒 松雄・月輪時房 共著

デリー——デリー諸王朝時代の建造物 の研究（三巻）

深 沢 宏

一、はじめに

一三世紀初めから一八世紀初めにかけて、ムスリムがイン

批評と紹介 深沢

ドの大半を支配した時期は大きく二つの時代に分けられる。

一三世紀初めから一六世紀中頃までのデリー諸王朝時代と、その後のムガル時代とである。この二つの時代のうち、デリー諸王朝時代は、ムガル時代に比べて、記述資料がはるかに少ない。そしてこのような資料的制約は予想し得る将来大きく改善される見通しはないようである。しかし、この時代には、従来あまり活用され得なかったもう一種の貴重な研究資料がある。それは、デリー諸王朝時代に構築されたことがほぼ確実な各種の建造物であり、それは首都デリー市とその周辺に現存するものだけでも約四五〇に及ぶといわれる。かかる遺跡について従来発表された幾つかの調査報告は、あまり網羅的でもなく、正確でもなかったという事情もあって、東京大学東洋文化研究所は「インド史跡調査団」を作り、一九五九年一〇月末から約五カ月と、一九六一年一月中旬から約四カ月、現地赶赴いてデリーに現存するデリー諸王朝時代の建造物の徹底的な調査を行なった。団長は山本達郎教授、副団長は荒松雄教授、団員は考古学の月輪時房助手、写真撮影専門の三枝朝四郎氏、写真測量専門の大島太市氏であり、他に図面作成に木村源蔵氏が協力した。また東京大学生産技術研究所写真測量研究室も全面的に協力したという。

この調査団の結成についてはその前史があった。即ち、戦後日本のインド史研究に先駆者的役割を果たしておられ、特に

デリー諸王朝時代史を専攻される荒教授が、インド留学の後半、一九五四―五六年をデリーで過され、この地方の各種の遺跡の存在を確かめ、広く写真撮影されたのが、その前史である。同時に山本団長もかねてこの時代の歴史に関心を持たれ、研究もされたことがあった。第一巻の冒頭にある山本団長の「序」において、同教授は「荒君はこの時代の歴史を専門としており、帰国後デリー遺跡の調査に関する報告を発表した。それに接して、私は前述のようなこの種の研究の重要性に鑑みて、東京大学として調査団を結成して組織的に調査を行うことを荒君に提案し、東洋文化研究所においてこの計画を進めることとした。その際、近年デリーの都市が急速に発展し、住宅その他多くの建築物が造られて、現存遺跡の調査が困難になり、又遺跡の消滅の恐れもあることは、この調査事業を遂行する一つの重要な動機ともなっている」と述べている。こうして結成された「インド史跡調査団」はわが国の海外遺跡調査としてはじめて写真測量の技術を採用し、先述のように二回にわたる実地集中調査を実施したわけである。調査の対象とされたのは、モスク六一、墓地七二、墓建築一四二、水利施設五二、その他の建造物五八、合計三八五の多数に及ぶ。そのほか、一九一六―二二年に刊行されたインド考古調査局の遺跡リストにおいて、この時代のものとして採録されていながら、本調査団の調査時にはその消滅が確

認乃至推定されたモスクや墓が四二もあること（その二つは一九五五年には荒氏自身がその存在を確認していた）、またインド考古調査局のリストにおいてこの時代の遺跡として示されているもののうち、本調査団によって、実際にはムガル時代或いはもっと後代のものと推定された遺跡が四七もあることも明らかになった。同調査団は、当初は、第一巻の「遺跡総目録」に続いて、モスク、墓建築、水利施設を扱う種類別研究三巻を含む少なくとも四巻の刊行を一九六九年までに完了する予定でいた。しかし、「一年一冊の報告書出版は、限られた人員をもって研究ならびに作図その他の資料作製作業を並行して行なう場合、決して容易なものではなかった」ので、東洋文化研究所における出版事業としては三巻を以て終結し、インド史跡調査団は解散した。その際、調査資料は丹念に整理され、研究者が利用出来る形で東洋文化研究所に保管されていることは言うまでもない。こうして発表された三巻の立派な、大きな報告書は、日々失なわれてゆく史跡の現状を考えると全く時宜に適しているだけでなく、従来の諸調査における少なくない誤謬を訂正し、またこれまで知られていなかった事項、無視された諸点を数多く明らかにしている。

言うまでもなく、私自身は、建築史や美術史には門外漢であり、またデリー諸王朝時代史を専攻する者でもないので、

本報告書の内容について技術的な批評をすることは到底出来ない。ただ、これらを熟読して、要旨を紹介し、所々に感想や質問をさしはさむだけである。何分にも龐大な報告書であるから、そのやや詳しいサマリーをここに書いておくだけでも意味があると思う。

二、第一卷「遺跡総目録」

第一卷は、冒頭に東洋文化研究所長の「刊行の辞」と山本団長の「序」があり、その後大きく三つの部分から成っている。「総論」、「遺跡総目録」、及び「図版」である。まず冒頭にある山本団長の「序」は、デリー諸王朝時代の歴史的意义、その時代の歴史建造物調査の重要性、調査団結成の経緯と構成、調査報告の刊行計画などを述べ、その中で、この調査報告の目標を規定し、それは、主として研究資料の提供にあり、部分的にのみ研究書の性格を具えているとされる。そして、研究資料としても研究書としても、多角的な視角をとるものとし、「歴史的・考古学的であると共に、宗教史・美術史・建築史にわたる諸問題」が取り扱われるを述べている。同時に、「同時代の地方遺跡やムガル朝のそれとの比較、更に諸外国、特に西南アジア・中央アジア諸遺跡との比較が問題となり、相互の影響関係にも留意する必要があるが、本調査団の報告書はデリーの遺跡、デリーの歴史に焦点をしば

っており、広範な比較研究は他日の問題とする」として、この報告書の範囲が限定されている。

さて、「総論」は四章からなる。第一章「現地調査と資料整理の概要」（荒・月輪両氏執筆）は、まず二回にわたる現地調査の経過と内容を説明し、従来の測量方法のほかに、地上立体写真撮影による測量方法を採用したこと、インド政府考古調査局との取り決めに従って、調査の対象を建造物の地上に現われた部分に限定し、発掘作業を全く行なわなかったことなどを述べる。次いで、遺跡写真、測量図面関係の資料、碑文及び文様の拓本、同時代の文献史料や一九世紀以降の研究・報告書の複写写真などの整理の方法が記され、そこでは、デリー地域を北から南に一〇の遺跡地区に区分し、地区ごとに遺跡に一連番号をつけた上で、これらの資料が東洋文化研究所に保存されていると記されている。

第二章「デリー諸王朝の支配の変遷」（荒氏執筆）は、この時代を、「初期」（一二〇六年奴隸王朝の成立から一三二〇年ハルジー朝の滅亡まで）、「中期」（一三二〇年トゥグルク朝の成立から一四一三年同王朝の滅亡まで）、「末期」（一四一四年サイイド朝の成立から一五二六年ローディー朝の滅亡まで）の三期に分け、調査の対象とされた史跡群の一般的歴史的背景として、各期における政治権力の変遷、デリー地域における城砦都市の移動の事情、イスラーム思想の動向と

それに関連する社会的諸問題などを説明している。各期について特に留意すべき点は次の諸点であろう。《初期》(一)この時期の諸王は、ムスリム軍勢に敗退したデリーのヒンドゥー王の城砦を利用しそこに宮廷を構えた(ラーイー・ピトラー城砦)が、奴隸王朝の末年にジャムナー河畔キルコリー^{キルコリー}の地に第二の首都が建てられたと見え、またハルジー朝の二代目の王はモンゴルの脅威に対抗するため、両首都のほぼ中間にシーリー城砦を建てた。(二)奴隸王朝の諸王は、領域の拡大よりもむしろ絶対王権の確立、ムスリム貴族勢力の抑制を計った。デカンにまで領域が拡大したのはハルジー朝の時代であった。(三)首都の近辺にいくつかの大きな貯水池が作られた。(四)ムスリム支配の確立と共に、スーフィーの聖者たちもインドに来て布教したが、デリーにおいて特に影響力が強かったのは、チシュティ派であり、この派の聖者たちはデリーの郊外に庵を建てて修業・布教をし、死後にはそこに墓が建てられ、やがてその近くに王侯や商人がモスクや墓を建て、次第に市場や部落が形成されていった。《中期》(一)初代王ギヤースッディーン・トゥグルクは、首都の東方にトゥグルカーバードの大城砦を造営し、そこに城壁、堰堤、水門などを利用する大規模な水利計画を実施した。(二)二代王は、首都をデカンに移す暴挙に失敗してデリー近辺の農業を一時荒廃させ、また北インド一帯に旱魃と飢饉も生じたので、デリー

近辺に様々な農業振興のための水利政策を採用したようである。(三)三代王は、この政策を更に進め、ジャムナー河とサトレージ河とを利用していくつかの人工運河を開き、多数の堰堤も作り、民生の安定と税収の増加を計った。また彼は各地にモスク、学校、庵も建てた。(四)こうして王朝権力が再建されたが、この王ののち弱体化し、貴族の勢力が増大した。(五)この間二代王はデカンへの遷都に失敗してデリーに帰ると、初代王の造営したトゥグルカーバードの大城砦を捨て、ラーイー・ピトラー城とシーリー城とを結ぶ大城壁を設け、「世界の榮光」と名付けた大都市区域の建設を始め、そしてその南壁を利用して集水・貯水設備を作り、農業回復の一策とした。三代王は、更にその北方に彼の名を冠した広大な新首都を作り、そこに多数の水利事業を実施し、また建造物の造営・補修も行なったが、この新都の中心的部分は今日のフィローズ・シャー・コートラである。《末期》この時期の基本的傾向は、王権の一層の後退と、貴族勢力の一層の台頭とである。これに対応して、中期の末からこの末期にかけ、デリーとその周辺に、大多数は恐らく貴族の手になる大小多様な墓建築、小型のモスクなどが数多く建てられた。

以上の諸点ののちに、本章の最後において、支配層が造営した巨大な建造物にも、民衆の社会・宗教生活と密接に関連するモスクや学校、経済生活に関連する水利施設があるこ

と、また村落の首長や共同体が造営したのであろう。小規模な宗教・水利施設もあること、更に、建造物の技術的問題や労働の問題など従来の史書や研究で無視された諸問題にも注目する必要があること、などが強調されている。

第三章は「建造物に関する従来の諸研究」（荒氏執筆）と題され、一八世紀末以後最近までのイギリス人やインド人などによるデリー遺跡の描写、研究、調査、リストなどの批判的検討がなされ、その際改訂版のあるものについてはそれと旧版との比較考証も周到にされている。そして従来の諸研究・諸調査にはば共通に見られる欠陥として、(一)一九一〇年代のインド政府考古調査局の総合的調査を除くと、著名な遺跡だけが対象とされ、この時代の遺跡を網羅的に扱ったものはないこと、(二)インド考古調査局のそれを含めて、従来の調査研究は、建造物の歴史的背景に関する究明が不正確で、文献資料や伝承を以って事実をそのまま示すものとして無批判的に受け入れていること、などが指摘されている。なお、この第二の点との関連で、荒教授は、別に、『東洋文化研究所紀要』に何回かにわたって詳細をきわめた考証論文を発表しておられるが、それは、従来の通説やしばしばその基礎となつてゐる伝承が如何に不確実なものであるかを痛感させるものである。

最後の第四章「建造物の種類とその現状」（荒氏執筆）は、

デリーに現存するデリー諸王朝時代の遺跡として、モスク、墓石、墓地、墓建築などの宗教的建造物、堰堤、水門、井戸、橋などの水利建造物、宮殿、狩り場、学校、庵、蒸し風呂、ヒンドゥー教徒の火葬記念碑などがあることを指摘したのち、それらの大部分が現在には利用されていない廃墟となつてゐるにもかかわらず、少なくとも歴史的に重要な遺跡は英領政府によつても独立政府によつても、かなり慎重に保護されてゐること、然し最近の急激な都市化によつて、調査・測量の困難になつてゐる遺跡も少なくないこと、更に宗教的・社会的習慣の相違や、政治的・軍事的事情から調査が制約され、或いは出来なかつた場合もあること、などを記している。

第一巻の第二の部分、「遺跡総目録」は本巻の中心的部分であり、六一のモスク、七二の墓地、一四二の墓建築、五二の水利施設、その他五八の遺跡が、種類別にば時代別に配列され、その各々の位置、様式、注目すべき点などが簡単に説明されている。このように、種類別・時代別に配列した点は、従来の調査報告に見られない新しい点であるようだが、そのほかに、遺跡の呼称についても、「と呼ばれてゐる」とか「として知られてゐる」という表現と、「と呼ぶ」という表現とが注意深く区別されている。また、一九一六―一二年にその存在が確認されていながら、本調査団の調査時点まで

に消滅が確認乃至推定された遺跡が四二もあり、他方一九一六―二二年のリストに、この時代のものとして記されている遺跡のうち四七はもっと後代のものと推定されている。そして、右のリストに含まれていながら、今回は諸般の事情で調査出来なかった遺跡も一四ある。近々四〇年ほどの間に、デリーの同時代の遺跡総数の一割近くが消滅したことを知ると、読者は、デリーに現存するムガル時代の遺跡、或いはデリー以外の諸都市に存在するムスリム時代の遺跡についても、至急にこのような調査を実施してもらいたいと痛感するであらう。なお、質問を一つ加える。五五頁のM17とある遺跡は、「モスク(?)」として「バーラダリーと呼ばれていた」と記されているが、これは、文字通り、「数多くの(標準的には一二の)扉を持つ宮殿、特に夏宮殿」と理解してよいのではなかろうか。

本巻の最後の部分、「図版」は、一六五頁にわたって、「総目録」に挙げられたすべての遺跡の写真を各一枚乃至数枚ずつ示している。実に美事な写真というほかはない。

三、第二巻「墓建築」

第二巻には、簡単な「序言」(山本・荒阿氏執筆)に続いて、長文の「序論」(荒氏執筆)があり、次いで第一編「個別的研究」として四つの墓建築に関する詳細な調査が記さ

れ、その次に第二編「総合的研究」があつて、最後に「図版」として個別的研究の対象とされた四つの墓建築の写真と実測図が収められている。

荒教授の「序論」は二章からなる。第一章「サルタナット時代の墓建築」は次の諸点を論じている。(一)死者を火葬にして、墓を残さないヒンドゥー世界に、ムスリムが侵入しこれを征服することによつて、埋葬し墓を作るという全く新しい宗教慣習が導入された。その際、大規模な墓建築は、「初期」には君主やその一族などに限られていたが、「中期」になると広く支配上層に属する者も含むようになり、更に、「末期」には、この傾向は一層著しくなった。また、支配層の墓建築のほかに、宗教的指導者を埋葬した場所にも、やがて墓建築が建てられ、敬虔なムスリムの巡礼・崇拜の対象となり、彼らの聖地とされるようになった。(二)広義の墓には、墓石・墓地・墓建築の三種類があり、また墓建築には、四角乃至八角の平面の上にドーム形の屋根をあげ、周囲を壁で囲ざしたものと、周囲を壁で囲まずに、四本―二本の列柱を立ててドーム形屋根を支えているものがある。(三)墓建築に関する歴史的資料には、碑文と文献とがあるが、デリーに現存するこの時代の一二の墓建築のうち、同時代の歴史碑文を持つのは八つ(「初期」一つ、「中期」二つ、「末期」五つ)に過ぎない。歴史的に高名な王たちの中にも、その墓の所在の不明な

人が多い。また一九・二〇世紀に新しく碑文をつけられた墓が少くとも五つあった筈であるが、そのうち四つの碑文は既に消滅している。これらはすべて一二本列柱式墓建築で、スーフィー聖者のものであると推定される。他方、この時代の墓建築に言及している同時代の主な文献は二つしかない。次いで第二章「墓建築に関する歴史的諸問題」は次の諸点を論じている。(一)墓建築は世俗の権力や宗教的権威の象徴でもあるので、一般民衆はその墓石の上に壮大な建造物を設けることを許されなかった。宗教者たちの墓も「初期」には墓石だけの簡単なものであったが、高名な聖者のそれは人々の崇拜の対象となり、やがて「中期」以後に後継者や信徒がその上に四角平面建築、特に列柱式建築を建てるようになった。ただし、デリーを中心に発展したチシュティー派聖者たちは国家権力から一般に離れていたため、あまり巨大な墓建築を残してはいない。(二)王侯の墓建築は王朝の交替などによって維持も補修も受けずに荒廃する場合が多かったが、王朝の保護を受けた限り、それらは大切に保存され、その維持のために三〇カ村の税収を与えられ、四六〇人もの朗詠者や召使いによつて仕えられた例もある。(三)「初期」に、墓建築の構造や形態の基本は西アジアから導入されたが、そのために用いられた工匠、石工、資材は現地で徴達された。初期の建造物には、ジャイナ教やヒンドゥー教の神殿の石材が利用され、また

文様のデザインはインド伝来の建築技術や美的感覚を示しており、更に碑文に刻まれたアラビア文字の書体も甚だ稚拙である。更にその後も、デリーに関する限り、西アジアから意図的に技師・技術が導入された証拠は見出されず、一般にインド人工匠・石工たちの技術的習熟によって、インド・イスラーム風の建築物が作られた。(四)埋葬の際に墓石の上に花を置く習慣があったが、これは恐らくヒンドゥーの習俗の影響であり、また聖者の墓や、一部の王侯の墓も、人々の崇拜・巡礼の対象とされたことは、スーフィーズムとヒンドゥー教との影響と思われる。また墓建築は、学校、集会・誓願・瞑想の場所としても利用された。以上の第二章の要旨のうち(五)の指摘は特に興味深いことである。

以上の「序論」に続く第一編「個別的研究」は、四章に分けて四つの墓建築を調べたものである。各章は二節から成り、第一節「墓建築の歴史的背景」は荒氏、第二節「墓建築の形態と構造」は主として月輪氏が執筆している。先に言及されたように、墓建築には、四角平面・八角平面・列柱式の三様式がある。それらのうち、年代の比定も比較的容易で、規模も大きく、保存状態も良好な四つ、「中期」の四角平面墓建築一、「末期」の四角平面墓建築と八角平面墓建築各一、「中期」の一二本列柱式墓建築一が選ばれている。

第一章「ギヤースッディーン・トゥグルクの墓」はトゥグ

ルカーバード大城砦の南側の小城砦風の建造物の中にある四角平面の墓建築を調査している。この墓建築の中に三基の墓石があり、その中央部に位置する墓はトゥグルク朝の創始者ギャースッディーンの墓、その東側の同形の墓は二代目の王の墓と伝えられて来たが、この墓建築には歴史碑文はないので、主人公の名を直接に知ることは出来ない。そこで著者は、同時代の二つの文獻と、同じ小城砦内にある別の墓建築の碑文とから、これらの墓石が通説通り、二人の王の墓石であり、しかもこの墓建築は初代王自身によって建てられたものと推定する。第二節では、この墓建築の形態と構造が詳しく紹介され、種々の点から見て、これは、「初期」の技術的遺産を継ぎながらも若干の新しい特徴を示しており、まさに「中期」を代表する墓建築であることが指摘される。

第二章「シェイフ・シハーブッディーン・タージ・ハーン」の墓は、ハウゼ・ハースの東方にある四角平面墓建築を取り扱う。これには、ローディー朝初期の年月日と埋葬者の名とを示す碑文があり、そしてこの埋葬者は恐らく同朝の貴族であったと推定されている。他方、「末期」の建造物であることが確かなほかの建築物と同じく、この墓建築にも次のような特徴が見られる。(一)壁面に三層のアーチ龕列がある。かかる様式は「中期」に始まり、末期に特に盛んになった。(二)ドームの基底部分(ドラム)が高められ、ドームも全体とし

て高く、建物の均衡が一層すぐれている。(三)建物の屋上の四隅に、かつて八本柱からなる八角平面のチャハトリ(傘型の小建築物)があつて、ドームの周囲を装飾していた。チャハトリが一般化し、ドームの周囲を飾るようになるのも「末期」の特徴である。(四)ドーム内の天井が様々な文様によって飾られている。以上四つの特徴は、「初期」や「中期」のものに比べて、ドームを高く上げて均衡を是正し、また外面や内部に装飾を施して単調さを改善したことを示す。そしてかかる傾向は後のムガル時代になると一層顕著になる。なお、従来の学説では、この墓建築のドームは、デリーで最初の二重ドームであるとされていたが、今回の測量の結果、一重ドームであることも判明した。

第三章「ムハンマド・シャー・サイイドの墓」は、ローディー・パークの内にある八角平面の墓建築についてである。これは、一九世紀以来サイイド朝第三代王の墓とされて来たが、著者は、これには何の確実な根拠もないとする。しかし、この建築物の諸特徴、特にドームを囲む多数のチャハトリ、ドーム内の豊かな装飾文様などによって、これが「末期」のものであることは疑いないとされる。

第四章「メヘロリー西方の十二本柱の墓」は、これの天井基部にかなり磨滅した歴史碑文が残っているのを判読し、これはトゥグルク朝第三代王の治世のものであり、そしてカ

「フル・ハーニー」という名の人物が埋葬されたか或いはこれと関係を持っていたこと、またムガル時代初期にモラーナー・シェアীবなる人物がこの地に埋葬された可能性があることを指摘したのち、その外観と内部の状態を解説し、次いでこれの近くにある墓域と小さなモスクの遺跡とを紹介している。

さて、第二編「総合的研究」は、一般の読者には第一編よりもむしろ興味があるかも知れない。本編は三章から成り、デリー諸王朝時代の「初・中・末期」の各期に一章を当てている。各章は、第一節「現存する墓建築とその歴史的背景」、第二節「墓建築の形態と構造」、第三節「墓建築に関する歴史的諸問題」と題する三節に分けられている。各章とも第一節は主として荒氏、第二節は主として月輪氏、第三節は主として荒・月輪氏の執筆になる。また、第一編が主に資料の提示を目的としたのに対し、第二編はもっと研究的性格を持ち、墓建築の展開を、政治と社会の状況、宗教や思想の動向などとの関連において考察しており、従って時にはかなり大胆な仮説や推論も提示している。

まず第一章「初期の墓建築」は、主として次の諸点を論じている。(一)奴隸王朝の諸王のうち、三人だけはその墓と伝えられる建造物が現存しているが、そのうち一つは中期に改築されたものである故にここでの対象にはならず、またほかの

二つもその埋葬者を確認することは出来ない。この点でも従来の諸学説は安易に過ぎた。他方、碑文を持つ、奴隸王朝の一王子の墓建築があり、従って、この王朝時代の墓は三つしか現存しない。またハルジー時代の墓は二つ現存する。(二)上の五つの墓建築のうち、碑文を持つ王子の墓は四角平面建築の下に八角平面の地下墓室の中に置かれているが、他の四つは四角平面墓建築で地下墓室はない。尤も、このうち王子の父王の墓とされるものには地下墓室を作ろうとした形跡はある。要するに初期の後半には地下墓室は作られず、これはムガル時代に至って復活するものである。他方、奴隸王朝時代の建造物には、技術も資材もインド在来のものでそのまま利用されたことがはっきり分る。また「初期」にも、列柱式墓建築が作られた可能性はあるが、現存するものはない。(三)「初期」の墓建築の数が甚だ少なく、しかもその殆どが王や王子のものであることは、初期の王権が絶対的で、一般の貴族でさえ王者の如き墓を作ることを許されなかったことを示唆している。

第二章「中期の墓建築」はトゥグルク時代について次の諸点を取り扱っている。(一)「中期」の墓建築の数は五〇に近い。そのうち約半数は、「初期」以来統一している四角平面墓建築であるが、そのほかに「中期」にはっきり現われる二つの新しい様式は八角平面墓建築と列柱式墓建築とである。五

○に近い墓建築のうち埋葬者の名を確認出来るものは少ないが、若干の四角平面墓は王の墓、八角平面墓ののち一つは明らかに王子の墓で、もう一つは宰相の墓と推定される。他方、列柱式墓は、四角・八角墓に比して労働も資材も節約したもので、これには聖者の墓が多い。(イ)多くの「中期」の墓建築が現存することは、「中期」の末になると王権の絶対性が崩れたことに対応して、貴族の多くも立派な墓を建てるようになったこと、またチシュティール派を初めスーフィーの諸宗派が展開し、影響力を増大させ、各地に聖者の墓を建てたことを示唆している。

第三章「末期の墓建築」は、サイイド、ローディーニ王朝時代のものとして推定される総数八〇乃至九〇の墓建築について次の諸点を論じている。(イ)サイイド朝は短命であったためか、この時代の碑文を持つ墓は一つもなく、伝承によって王の墓とされている建造物も二つあるだけである。他方、ローディーニ時代の碑文を持つ墓は四つあり、それらは、本巻第一編第二章で検討されたものを含めて貴族と推定される人物の墓二つ、聖者の墓一つ、その他一つである。また埋葬者について伝承が残っている墓が四つあるが、そのうち三人は宗教聖者である。(ロ)「末期」の墓建築の主な特徴は次の諸点である。イ、「初期」から行なわれた四角平面墓の造営が一層増加し、その数は五〇を越えることのほかに、ドラムが次第に

高められ、ドームも強調され、建造物の内外に多様な装飾が施され、腰々規模も大きい。ロ、三名の王の墓と推定される三つの八角平面墓が加えられたが、これらも高いドラムとドーム、多数のチャハトリやその他の装飾物で飾られている。ハ、三〇を越える列柱墓も作られ、これにも多様な装飾が加えられている。(ニ)「末期」の墓建築の数が飛躍的に増大し、かつ一般に装飾が華美になったことの主な理由は、恐らく、ローディーニ朝の権力構造の特殊性に求められる。即ち、「初期」・「中期」のトルコ系諸王朝では、貴族勢力を抑えて王権を絶対化しようとする傾向があり、「中期」の末頃までは事実としてそうになっていたのに対し、ローディーニ朝はアフガン諸部族の連合体制であって、王権は弱く、部族の貴族たちが強盛であったため、これらが競って壮大・華麗な墓を建築したのだと推定される。更に、「中期」の傾向を継いで、スーフィーの各派も一層分離・拡大して、それぞれの聖者の墓を建築したことも、墓建造物の数、特に比較的に簡単な列柱式墓の数を増加させた。

以上に紹介した趣旨のうち、トルコ系民族とアフガン系民族とのいわば国家形成原理の相違が、建造物のあり方にまで反映しているという見解は特に卓見である。これを更に発展させて、同じくトルコ系のムガル帝国やアフガン系のバフマニール王国の遺跡についても適用すれば興味あることであらう。

う。なお、本編の中で叙述のやや不明瞭な点を一つ指摘しておく。一五三頁に「サルタナット末期に属すると考えられる墓建築のなかで、埋葬者について伝承がのこっているものは、他につぎの四基の建物がある。そのいずれもが、十二本柱の形式の墓建築ないしはその変形であることは興味がある」と記されているが、この「サルタナット末期」というのは、正確には「ローディー朝の時期」を指すと思われるが、前後をよく読まないと意味がはつきりしない。

この第二巻の最後に、第一編で取り上げられた四つの代表的な墓建築の立派な写真が三一頁にわたって収められ、その後これらの実測図一四枚が示されている。

四、第三巻「水利施設」

第三巻の構成は第二巻のそれと同じである。冒頭に山本・荒両氏の「序言」があり、次に長文の「序論」、次いで第一編「個別的研究」、第二編「総合的研究」があり、最後に「図版」が来る。

冒頭の「序言」は本巻の意義について「この時代の遺跡のなかで、水利施設は、研究対象としてはこれまでほとんどとりあげられなかった。しかし、これらの建造物は、本来、民衆の生活様式や生産関係にかかわりをもつ性格のものである、当時の支配層による経済社会政策と密接な関連をもって

建設されたものが多く、他の建造物に比して特異な歴史的意味をもつものである。われわれが、水利施設の遺跡に一卷の報告書をあてた理由の一端も、またそこにあるといえよう」と述べている。

さて「序論」(荒氏執筆)は二章から成る。第一章「デリー地域の歴史的背景と地理的環境」は、デリー諸王朝時代に造営された水利施設の遺跡は広範なデリー地域にわたって見出されることを述べたのち、この地域の地勢、降雨量、地質、主要農産物などを説明し、しかし、ムガル時代にデリー地域は小麦や砂糖キビの自給を出来なかったことに基づいて、先行するデリー諸王朝時代の水利政策の成果を過大評価することは慎しむべきであると指摘する。この指摘に留意した上で、デリー諸王朝時代とムガル時代とは、デリー地域における水利施設のあり方や消費人口の規模に大きな相違はなかったであろうかという疑問を提出しておく。

次いで、第二章「水利施設の種類とそれに関する歴史的資料」は、まず、本調査団の対象とした水利施設は一七の井戸、一八のバーオリまたはバーイン(貯水池を持つ特殊な井戸)、一一の堰堤と三つの水門であること、しかし今回は取り上げられていないが、この時代に建造された若干の大規模な貯水池や運河もあったことを指摘する。次いで、これら四九の水利施設のうち、三つの井戸に歴史碑文があり今は

デリーの考古博物館に保管されているのを除くと、他に歴史碑文はなく、また同時代の文献もこれらに言及すること乏しいため、現存する水利施設の遺跡の資料的価値は一層大きいことが強調されている。そして最後に、かかる水利施設のモデルは、ムスリム支配者が西アジアから導入したものではなく、インドに古くからあったもので、現に、デリー地域にも、明らかにヒンドゥー時代のものである大規模な貯水池や堰堤の遺構が残っており、デリー諸王朝時代の初期の支配層が従前からの水利施設にそのまま依存したことは容易に想像されると述べられている。ここで、今日北インドに広く見られる「ペルシア井戸」と呼ばれるあの特異な汲水技術・施設のモデルは果してペルシアから導入されたものかどうか、若しもそうであれば何時頃のことなのか簡単に言及してもらいたかった。

さて第一編「個別的研究」は、歴史碑文や史書によって、建設の年代と歴史的背景が或る程度まで明らかな遺跡、形態と構造の点で特徴的な遺跡、又は当時の水利計画の中で重要な役割を持ったであろう遺跡として、二つの井戸、二つのバ・イオリ、三つの水門及び一つの堰堤を選び、その各々に一章を当てて地理的環境と歴史的背景を説明し、併せて形態・構造・機能を詳述している。各著者の執筆分担区分は本巻の冒頭に示されている。

第一章「スルターンブルの円井戸」は、デリーの南方、スルターンブル村にある簡単な構造の円井戸を取り扱う。これは、碑文によって一二六二―一六三三年に建造されたことが明らかで、この時代の「初期」のものであり、一九一〇年代にはまだ使用されていたが、今回はもはや利用されていない。更に、これには後代の追加・補修部分が多いこともあって、建設の目的は、農業用水のためか、或いは飲用水のためか、又は当時この近くにあったことの明らかなモスクに付属していたのか、明らかでないといわれる。

第二章「フィローズ・シャー・コトラの円井戸」は、デリーにある「中期」の有名な史跡フィローズ・シャー・コトラの中に位置する複雑な構造を持つ巨大な円井戸を取り上げる。著者は、この井戸には歴史碑文もなく史書における言及もないことを指摘したのち、その位置から見て、これはフィローズ・シャー・トゥグルク王の宮廷に住む多くの人々や、更に家畜類のための用水設備であったと推察している。次いで、この円井戸の構造は甚だ複雑であって、説明を二、三回読み返さないとイメーシが浮ばないのであるが、要するに次のようなものである。直径二七・二メートルの円形建造物の中央に直径八・九メートルの円井戸が掘られていいる。そしてこの建造物の内側は二層に分れており、各層には井戸を囲んで東・西に直径六メートルの円形部屋、南・北に間

口九間・奥行三間の扇形の部屋がある。その扇形部屋の各々の奥に九つの竈が作られ、各竈の奥に水路があつて、竈から竈へ水が流れる仕組みになっている。また上層の扇形部屋では、最後から二つ目の竈で水が止まり、そこから部屋を通つて、再び井戸に流れ込む。他方、水はこの建物の屋上で汲み上げられ、そこから水路を通つて一部は建物外の貯水槽に流れ込み、一部は先述の、上下両層の扇形部屋の竈に流れ込むようになってゐる。また下層円形部屋の一つから東方ジャムナー河に及ぶ長さ一一〇メートルの地下道が掘られ、これは秘密の通路となつてゐたらしい。また屋上には、井戸の部分を除いて、屋根がかつてはついていた。この井戸建築の機能について著者の見解はあまり明瞭でないが、王侯貴族の、甚だ贅沢な避暑用の「水御殿」であつたのではないかという印象を私は受けた。

第三章「ガンダク・キ・バーオリー」は、カットブ・ミナールの南方にある、全長四一メートルもある巨大なバーオリーを取り上げる。この水は今日全く汚染しているが、元来は、硫黄を含み、皮膚病などに効くと信ぜられて、今でもこれを身体に塗る人がいるという。著者は、この建造物の井戸部分の柱にヒンドゥー寺院用の石材が使用されていること、そして建物の一部に一九五九年にはアラビア文字の碑文の断片が残つてゐた（これは二年後には消滅してゐた）こと、その他

若干の点から考えて、これを「初期」の建造物であると推定する。そして本来は一般の飲用水や農業用水のために建てられ、のちにこの近辺に様々な宗教建造物が建てられたのでこれらとの関連でも利用されたと理解される。他方、汲水方法として、階段を降りて直接に貯水池水面から汲む方法と、井戸部分の屋上からつるべを用いて汲み上げる方法とが指摘されているが、この後者の当時における具体的な仕方は、後代の付加設備も多いため、確認出来ないとされている。

第四章「ラージョーン・キ・バーイーン」は、第三章で扱われたバーオリーの近くにあり、既に水の枯れたもう一つの巨大なバーオリーを対象としている。これは、モスク及び墓建築と併設されているのであるが、このモスクの建築様式、特にその前庭の墓建築にある一五〇六年の歴史碑文、更にバーオリーそのものの様式から考えて、「末期」、ローディー朝時代の建造物であると推定されている。そして、この三つの建造物の接合の具合から判断して、モスク、バーオリー、墓の順序に作られたことも指摘されている。更に、この地域はムスリムの宗教施設の多い、一種の聖域であるから、このバーオリーも、何か宗教的な意味を持つ水利施設であり、最上層の部屋やヴェランダは人々の休憩所、宿泊所、庵などとして利用されたであろうと述べられている。

第五章「トゥグルカーバードの水門」は、「中期」の初頭

に作られた大規模な水利施設の水門に関する調査である。大城砦トゥグルカーバードの南城壁のほぼ東端と、その東南にあるアーディラーバード城砦とを大堰堤で結び、更に、西南方面の丘陵の谷合に二つの堰堤を設け、こうして大城砦の南側に、南北七〇〇メートル乃至一キロメートル、東西一・五キロメートルの大盆地を作り、雨期に大貯水池となるように仕組んだ水利施設の遺構がある。同時代の文献資料はこの水利施設に全く言及していない。いづれにせよ、大城砦南壁とアーディラーバード城砦とを結ぶ堰堤の北の部分に、三つのアーチがあり、その各々に三列四段の巧妙に作られた流水孔が作られ、西側に貯えられた水が必要に応じて東側の平野に流す仕組みになっている。また流水孔の横には、最上段の流水孔より三メートルほど高く、また流水孔の屋上より一メートルほど低い場所に流水路が作られていて、貯水量があまりにも増大した時には、水門を開かなくても、自動的に水が東方に流出する仕掛けになっている。本報告によると、この西側の盆地は、今でも雨期になると一大貯水池のようになると記されているが、この水門そのものは、下部は土中に埋まり、今はもはや利用されていないらしい。何故であろうか。何時頃から廃墟になったのであろうか。

第六章「サート・プラ」は、「中期」のもう一つの水利施設に関する調査である。ムハンマド・ビン・トゥグルク王

は、トゥグルカーバードの大城砦を放棄し、既存の二つの城砦、ラーイー・ピトーラー城砦とシーリー城砦とを南・北二つの城壁で結び、ジャハーン・パナーという新首都の造営に着手したことは、第一巻の「総論」第二章で述べられた。この南城壁の一部に全長五四・五乃至七九・五メートルに及ぶ一一の巨大な水門の遺構があり、それは、雨期に南側の平野に貯えられた水を、北側の城壁内の低地に流し込むための装置である。そして、著者は、各水門にはかつて流れを調節するための遮断板と、乾期に流水孔を防ぐための扉もあったことを指摘し、水門の構造を詳しく説明している。しかし、この水門が作られた年代や具体的な目的は確かめ得ないとされている。

第七章「ワジーラーバードの水門」は「中期」のもう一つの水利事業として、デリー北方の水門を取り上げる。これは、ジャムナー河に流れ込む現存の運河（これも「中期」に作られた多数の運河の一つであったと推定されている）の上にかかれた橋のすぐ北側にある。また橋の南にモスクと墓建築がある。橋、モスク、墓建築の建造様式や或る史書の関連記事から見て、この水門は「中期」の建造物と推定されている。これは、長さ一三メートル、幅七メートルの小規模の水門で、両面に三つのアーチが設けられ、各アーチに五段の流水孔があり、下の二段についてだけ遮断装置の跡が見出さ

れる。著者は次の三点を検討しながらこの水門の機能を明らかにしようとする。第一に、五段の流水孔のうち下位二段にだけ遮断装置があったことは、この水門が元々低水位の水のコントロールを目的としたことを示している。第二に、橋と並んで水門があることは、本来、橋の下を流れる運河とこの水門を流れた水とは別々の水流であったことを示唆している。更にこのことは、橋の西方、運河の北岸がかつて堤防の役割を持っていたことを推察させる。著者はこの推察を裏づける若干の根拠も指摘する。第三に、この辺の地形は、水門を流れた水が、ジャムナー河の氾濫の際には東から西へ流れ、それ以外の時には西から東へ流れたことを示している。換言すれば、このことは、ジャムナー河の氾濫水を取り入れて、或いは橋の下の運河のかなり上流から水を取り入れて、水門の西北に広がる広大な平野に浅い人工氾濫を一時的に生じさせたものであることを示唆している。

甚だ興味深く、かつ説得的な推察であるが、これを読むと、この巧妙な水門が使用されなくなったのは何時頃のことであり、そして何故であろうかという疑問を覚えるであらう。

最後の第八章「マヒパールブルの堰堤」は「中期」のもう一つの水利施設である、デリー西南方マヒパールブル村の南北、東西に鍵形に作られた長さ一・四キロメートルの堰堤を

対象とする。これは、同時代の史書に言及され、また建設様式から考えても、中期のものであるとされる。そして、この辺の地形から見て、東北に広がる丘陵地帯の雨水が流れるのをこの堰堤で止めて、人工氾濫を起こさせたのち、堰堤の南側と西側に一つずつ作られた水門から水を南・西方に放出した装置であることが分る。

この説明において、一方で堰堤の所々は崩壊し、中央部分は村の住宅のために切断され、そして水門の流水孔の下半分は土中に埋もれていながら、他方で、堰堤の北端と南端とに近代に作られたコンクリート製の低い堤防が増設されていることを読むと、この堰堤と水門が利用されなくなったのはむしろ最近のことではないのか、またそれにしても何故だろうか、という疑問を感じさせられるであらう。

さて、本巻第二編「総合的研究」は、四章に分けて、デリー諸王朝時代の水利施設の現存状態、それらの構造と機能、「中期」の水利計画、水利施設に関する歴史的諸問題を検討している。

まず第一章「現存するサルタナット時代の遺跡」（荒氏執筆）は次の諸点を論じている。(一)「初期」に属すると推定される水利施設は、今回の調査の対象とされなかった一つの貯水池跡を除くと、井戸とバーオリー合計三つだけであり、堰堤も水門も現存しない。このことは、「初期」の支配者たち

が、主として既存の水利施設に依存したことを示唆している。この三つのうち一つのバーオリは、当時の高名な聖者の墓の近くにあり、今日でも順礼者によって使用され、デリー諸王朝時代の水利施設のうち実用されている数少ない事例の一つである。(二)「中期」のものと推定される水利施設として、井戸一、バーオリ五、堰堤と水門一四の遺構が現存し、「中期」に水利事業が大いに促進されたことを示している。そして、井戸やバーオリは別としても、堰堤や運河など大規模な水利事業が数多く建設されたことは、中期の国家権力が強大であったことを意味している。そして、二代及び三代の王の水利事業は、「支配層としての奢侈生活上の諸目的もあつたにせよ、度重なる遷都や農業事情の逼迫、さらに各地における反乱の統廃や治安回復の必要という特殊な歴史的条件のもとで実施されたものであることを認識する必要がある」として、この時期の特殊な条件が強調されている。またこの二人の王の相違について、前者の水利計画は城砦の内側やその周辺に見られるのに対し、後者のそれは、権力の中央拠点とは直接に関連のない場所、一般の被支配層の農業生産の振興を主要な目的の一つとしていたことが指摘されている。(三)「末期」に属する水利施設として、五つの井戸と九乃至一〇のバーオリがあり、堰堤は見出されないが、このことは、墓建築との関連でも指摘されたように、「末期」

には王権が後退したため大規模な水利事業が実施され得なかつた反面、弱小な中央権力の間隙に割拠しはじめた地方権力者や地主層、或いは宗教各派が井戸やバーオリなど中小水利施設を建設したことを示唆している。

第二章「水利施設の構造と機能に関する諸問題」(月輪氏執筆)は、まず井戸とバーオリについてその構造と、可能な汲水方法とを説明したのち、堰堤と水門について、これを、城壁を兼ねた堰堤、地形・運河・川を利用し一定地域に水を貯めるための人工堰堤、自然の帯状岩盤をほぼそのまま使用する自然堰堤の三つに区別し、各々の例を挙げて、そこに設けられた水門の流水調節方法を説明している。

第三章「サルタナット中期の水利計画の内容とその意義」(荒・月輪氏執筆)は、デリー諸王朝時代のうちで特に水利事業が振興されたトゥグルク朝時代について次の諸点を論じている。(一)第一編第五章でその水門が調査されたトゥグルカーバード城南の大水利事業は、雨期に人造湖を作るもので、その目的は人工氾濫による農業生産の増大のほかに、雨期における都城の防衛、都城の用水確保、風光などでもあったと推定される。(二)第一編第六章で紹介されたサート・プラの大水門を中心とする水利計画も、人工氾濫という主目的のほか、防衛、給水、風光、狩猟などの副目的を持っていたと思われる。(三)特に第三代王は北インドの各地に多数の運河や堰

堤を作ったこと、そして人工氾濫による農業生産の増大が重要視されたことを同時代の史書は述べており、これから見ても、デリーに現存する当時の堰堤や水門の主目的がやはり人工氾濫にあったことが分る。そのほかに、灌漑用水・日常用水の確保、狩猟、避暑、風光なども目的として考えられる。

第四章「サルタナット時代の水利施設に関する歴史的諸問題」（荒氏執筆）の要旨は次の通りである。（一）「中期」のものと推定される堰堤の位置は、地形的に最適条件を備えている「デリー・リッジ」に沿うた地域に設けられており、かかる計画立案者の着想はすぐれている。他方、井戸やバーオリーの目的をその造営位置から推察すると、城市居住者の飲用・日常用水のためのもの、農業地域にあつてその日常用水・農業用水のためのもの、墓やモスクなど宗教施設との関連で作られたものなどがある。（二）諸種の水利施設の建設者を推定すると、若干の井戸やバーオリーのほか、特に堰堤、大規模な貯水池、運河などは時の国王権力が作ったであろう。他方で、井戸やバーオリーなど中小水利施設の多くは、村の共同体によつて建設された場合もあったであろうが、デリー地域の特殊性を考慮すると、地域的権力者や地主によつて建設されるのが普通であつたと思われる。同時に、イスラームの宗教施設の一部として作られた井戸やバーオリーは、宗教者、その宗派・教団、信徒たちによつて建てられたであろう

が、しかしかかる宗教的性格を持たない世俗的な井戸やバーオリーは、ムスリムが建てたよりも、むしろ富裕なヒンドゥー、地域的有力者が作った場合の方が多かったであろう。事実、デリー諸王朝時代に作られた井戸のうち四つにはサンスクリット語の碑文があつて、今は博物館に保存されている。バーオリーのモデルもムスリム支配以前にインドにあつたことは明らかである。

最後に本巻の末尾の「図版」には、第一編「個別的研究」の対象とされた八つの水利施設の美事な写真と実測図が多数収められている。

五、むすび

以上に、時折り私自身の感想や疑問も付記しながら、この三巻の調査報告の要旨を紹介した。言うまでもなく、実際の叙述はこの要旨よりもっと慎重でかつ厳密である。特に建造物の構造に関する説明は甚だ詳細である。この調査報告が出版されるまでの一〇年間、山本団長は公務に忙殺され、荒副団長は公務のほかに持病で苦しまれたことを知る者として、特に、この難事業を遂行され、数々の未知の資料や見解を提示された御努力に対して心から敬意を表せずにはおれない。この貴重な調査報告が、日本国内だけでなく広く世界の研究者によつても利用されるように、近い将来に英訳版が刊

行されることを切に期待する。

更に、類似的の調査研究が、後進の研究者グループによつて、デリーに現存するムガル時代の建造物、中世インドに栄えた他の諸都市の建造物、或いは広く農村地域の水利施設にまで実施され、文献資料の乏しい分野に新しい光明を与え、私たちを啓蒙してくれることを、大いに待望したい。その際希望したいことの一つは、王侯の廟墓が時間の経過につれて廃墟となることは止むを得ないとしても、民衆の経済生活と密接に関連する農業用水利施設でさえ、現在ではおおむね廃墟となつてゐるのは何故なのか、そして何時頃そうなつたのか、という点についても出来るだけ展望を示してもらいたいということである。

(四六・六・一五)

東京大学東洋文化研究所、一九六七年、一九六八年、一九七〇年、30 cm × 40 cm

第一巻「遺跡総目録」二三頁+一二二頁+一六五頁(図版—遺跡—遺跡写真)

第二巻「墓建築」一八頁+一八七頁+四五頁(図版—遺跡写真及び実測図)

第三巻「水利施設」一七頁+一四〇頁+五一頁(図版—遺跡写真及び実測図)

ラドロフ・

チュルク語方言辞典のドイツ語索引

池 上 二 良

原本 W. Radloff, Versuch eines Wörterbuches der Türk-Dialekte (1893—1911) は、チュルク語研究史上の一大労作であり、一九六〇年ハーグの Mouton 書店で、また一九六三年にはソ連で、それぞれ影印本がつくられてゐる。この辞典の解説、評価はムトン版影印本の O. Pritsak の序文にくわしい。辞典のなかで、種々の文献から引用した語やほかの人の採集による単語はすでに価値がなくても、ラドロフ自身が諸方言から採集したぼう大な数の単語が、なおチュルク語研究にとつて重要な資料であることは上にふれた序文に記されているところである。

ロシア語とドイツ語で記されたこの辞典の逆引き索引の必要性については、すでに A. N. Samojlovic が説いているところであるが(上記序文 XXIII) ドイツ語索引の作製が一九六〇年からハンブルグで A. v. Gabain と W. Veenker の指導、監修によつて行われ、このことについてはそのはじめのころわたくしはたまたま同地にいてきいていたが、ここに第一分冊(aからeまで)が刊行された。なお本書は、ドイツ語による意味索引のほかに、チュルク語見出語をアルフ